

429) 草餅

小生の4月は毎週毎週桜の追っかけである。山梨、長野、茨城、福島と、樹齢300年以上の一本桜を訪ね歩いて、春が遠ざかるまで、延々と続く。

先日花を見た後、周辺を走っていると、寺の境内で朝市が立っていたので覗いてみると、野菜や筍や果物、それに搗き立ての草餅が売られている。これは三文の徳とばかりに、とれたての野菜と筍それに草餅を仕入れて、帰路に着いた。しかし毎週毎週毎週、朝早く暗いうちから300キロから500キロも車を走らせていると、あたりかまわず睡魔に襲われて眠くなる。国道を走り始めてしばらくするとどうにも眠くなってきたので、道が広くなった所に車を止めて、一眠りするかと思っ、車を寄せると、急に草餅が食べたくなってきた。搗きたてのためまだ暖かく、何ともうまそうなのである。「砂糖がほんの少し入ったこの黄な粉をつけながら食べるんだよ」と言って別に黄な粉を包んでくれた農家のオジさんの言葉が妙に耳に焼き付いて、またそれがうまさを増幅させているようでもあった。それですぐに草餅を頬ばると、これが何とも香ばしい。ところが睡魔の方が他の何よりも一層勝っていたようで、いつのまにか眠り込んでしまった。ところが胸苦しきで目が覚めた。口に頬ばった草もちが喉に詰まりそうになっていたのである。あわてて吐き出すと、草餅は膝の上から足元に転がり落ちた。あ～、もったいな～。それにしても窒息しないでよかった。よかった。物を食いながらのウタ夕寝は命にかかわるということなのであります。